

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

大学の授業で人間について語る —Uniquely Humanとはなにか?—

佐々木 康成[†], 山田 範子[‡], 森 延江[§]

1. はじめに

本誌が創刊されて9年目を迎え、佐々木・小西(2022)⁽¹⁾から2年ほど休止していた当シリーズに、より多様な形で教養教育とその周辺を伝える場としてもどってきた。

本稿は、2024年度から教養教育科目として新たに開講された「教養の門」⁽²⁾で授業用オンデマンド教材として用いた談話の一部を掲載するものである。「教養の門」は、数人の教員による談話を受講生に届ける「対話」動画6編と、教養教育科目の担当者による各科目の学問的なエッセンスを届ける「学問の魅力」動画22編の視聴につづいて、「対話」動画の必須6課題と「学問の魅力」動画からの選択12課題によって評価される。「対話」は、本学教養教育の理念に散りばめられた6つのキー概念である「身体」「言葉」「心」「社会」「人間」「自然」を談話テーマとして設定された。一方「学問の魅力」は、2024年度から新カリキュラムとなった教養教育科目⁽³⁾の分野の中から、「哲学」「倫理学」「宗教学」「歴史学」「人文地理学」「法学」「日本国憲法」「経済学」「経営学」「文化人類学」「メディア論」「教育学」「統計学」「環境学」「デザイン学」「ウェルビーイングと健康」「言語学」「音声学入門」「コミュニケーション論」「日本文学」「英米文学」「教職課程」の22分野について、各科目の担当者が当該科目の学術分野の対象と

する問いや面白さなどの魅力を参考文献とともに紹介される。

このうち本稿では、「対話」動画の「人間」をテーマとして扱った談話⁽⁴⁾の模様について、内容の大幅な編集ならびに注釈を施すことにより、実際の談話では曖昧だったり不正確だったりした箇所の編集をすることで、テーマの理解をより促すことを目的とした。

まずは冒頭、本談話のコーディネータである森延江教養教育部准教授の発言から始めていく。

2. 関心分野と研究の限界、そして挑戦

森(も) 今日は人間について思うことをしゃべるといふこと。高校の時に人類や地球が生まれてから今日までの時間を一日や一年間に置き換えて、人間がどれぐらいのタイミングで出現したかを聞いたことがあって、とても感動した覚えがあるんですよ。それでまた少し調べたんですけど⁽⁵⁾、地球が誕生したのが46億年前ぐらい、そして原始生命体が現れたのが2月の終わりぐらい。それから6月の初めか、5月の末ぐらいに光合成ができるバクテリアが生まれたらしいです。それで酸素がワーッと放出されるようになって⁽⁶⁾、でも長い時間かかってオゾン層ができたのが、なんと11月の半ば⁽⁷⁾。すごい。

[†] yasaki@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[‡] y-noriko@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University Women's Junior College)

[§] m-nobue@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

その後、鳥類とか恐竜とか、爬虫類とか出たんですけどね。人間に関して言えば、猿人の誕生は700万年前ぐらいになります。これは、地球の誕生から今日までを1年間とすると、12月31日の大晦日の朝の10時40分ぐらいにあたるそうで。それから、二本足で歩くのに特化したり、石器を使ったり、火を使ったりして、現生人類である私たち人間の祖先が農耕や牧畜を始めたのが、大晦日の夜、新年の1分前ぐらいで、キリストが誕生してAD、紀元後になったのは、新年の15秒前で⁽⁸⁾。そして、新年の1秒前にやっと産業革命が起きて20世紀になったという感じらしいんですけど⁽⁹⁾、改めてすごいなあと思いました。

それでは、人間についてお話を続ける前に、ここで、まず自己紹介をしていただけたらなと願います。で、どなたから…はい、じゃあ元気に手を挙げられた山田先生からお願います。

山田(や) 短大部の山田範子と申します。専門は国語教育です。最近気になってるのは、ドラえものの作者の藤子・F・不二雄先生です。私、2023年度「富山県ゆかりのマンガ作品の分析と教材開発⁽¹⁰⁾」っていう研究をしていたんですけど、藤子・F・不二雄先生の作品を教材化して授業にしたんですが、このF先生っていう方の天才ぶりがすごくて。

最近、ドラえものの映画も見てきたんですが、今やってる新作のドラえものの映画も、F先生のアイデアをもとに膨らませて映画化してるってことで、もう亡くなられてずいぶん経つんですけども、元ネタがあるくらいにアイデアがたくさんあった、藤子・F・不二雄先生のことがすごく気になって色々と調べて、すごい人だなあと思っています。

も) それでは佐々木先生。

佐々木(さ) はい、大学の教養教育部というところに所属している佐々木康成といいます。

専門は、もともとは実験心理学で、特に脳の研究に重きをおく生理心理学を専攻し、大学院生の頃は、海馬という記憶や空間認知に関わると言われている脳領域とその周辺領域を探っていました。つづいて前の職場では、情報とかプログラミングとか統計を教える機会があって、それですこしずつ情報の方に寄ってきていて、今、この大学では、心理学と情報学と、それから今この番組を見ている人には、デザイン学を教える立場にもあります。

特に最近、ボク自身、デザインということに関心を持ってきました。ボクの祖父は早くに死んだんですが、昔、国鉄⁽¹¹⁾の建築に関わる場所に所属してたようで、大工さんみたいな仕事してたようなんです。定年になって家にいるようになってから、ボクのちっちゃい頃にはその祖父の後をついてまわってトンカチ持ったりかんなど削ったり、なんかそういうことをいろいろして回ってたっていうのがあって、もし、祖父が生きていれば、建築の方に進んでたんじゃないかなと今になってみると思います。モノを作るとか、構造を作るとか、そういうことに関心が確かにあったなと今になってみると思えます。組織を作るとか、皆さんにどういうふうに関わりたいかとか、皆さんにどういうふうに関わりたいかとか、そんなことばかり考えてる今日この頃でもあるなあと、今お二人のお話をお聞きしていて、ボク自身もちょっと振り返ってみました。本日はよろしくお願いします。

も) ありがとうございます。では、私もちらっと自己紹介をします。佐々木先生と同じく教養教育部で、英語やゼミナールを教えています。専門は統語論っていうやつで、それをひたすらやってきました。この頃興味があることはというと、やっぱりまた健康に興味が出てきたというのと、いかになるべく粛々と毎日を無心に生きるかっていうことで、そんなことをまたいろいろと考え出したりと

か、そんなこんなの日々でございます。

それでは、先生がたに今のご自分の研究や専門的なご興味について、一言お願いしたいのですが。今回は私から、いいだしっぺで始めます。私は統語論をバリバリとやってきたのですが、大学院在学中に、私の世代では人間の言語を、普遍文法、ユニバーサル・グラマーという形で明瞭に形式化することはできないと考えました。一番の問題は近隣科学が発達していないからです。特に数学が。だからもうこれは無理だということわかって、例えば、生成文法で明らかにディスカッションされるべきことが、理論の公理、前提として組み込まれていたりしてですね。まあ、そうするしかないだろうなとずっと想っていたのですが、このごろ、それでもいいんじゃないかなと考え始めました。こだわり続けている人たちはこだわり続けているし、今の段階で解ることだけでも分析して進めれば、それはそれでこれからの人たちに役に立つのかなと考えるようになりました。

私の関心は、人間という種にユニークであると仮定されている普遍文法、UGという、どの言語も演繹できる形式、もっと平たくいえば、どの言語にもなり得るいわば幹細胞みたいな、その能力とは何かというものの形式化です。人間が持っている言語能力を形式化すること、それはまだまだ捨てたもんじゃない面白い分野だなと、このごろまた想います。

さ) 昔、言語を研究するのに言語で研究できるのかってずっと思ってたことがあって、今先生がおっしゃったみたいにそれは無理だろうみたいなイメージはボクも持っています。例えば、脳もそうで、脳科学は今とても発展してるんだけど、脳にしても言語にしても、ちょっと実は無理があるんじゃないかなという気がしてるところがあります。宇宙とか数学とか、あるいは社会科学とかっていうのは

言葉で論理的につなげれそうな気がするんだけれども、脳と言語の研究はね、はたしてできるんだろうか、ほんとは、メタ言語やメタ脳みたいなものが必要なんじゃないだろうかと思うんだけど、決してそれがまだ発明されているわけじゃないので、だから難しいんじゃないかなと個人的には思ってるんです。

も) そう。そして、誰も敢えてそれを探究しようとはしない。あまり力を注いだりはしませんね。

さ) きっとそうなんです。そこが問題だと思います。そういうところからしかアプローチできないと思うのです。現在のように、脳のマッピングをしてみるとか、言語のランドスケープを見るとか、何かそういう話だけだと解き明かすことにならないんじゃないかと思うわけです。なので、そうすると本当にそれでわかったことになるのか、ただの対応づけを見ただけではないかっていうふうに見えてしまいます。だから自分がどこまで自分のテクニックを持ってやれるかっていうことだけでなく、その上の段階をもう見つけれないんじゃないかと思った瞬間がね、そういう感じがね、ずっとしてたところがありました。

も) うんうん、なるほどね。ちょっとなんか腹立たしいよね。山田先生、どうでしょう。山田先生は、ユニークに超ユニークと表現していいのかわからないのだけど、やっぱり漫画とか、そういう視覚的なものを子供たちがどういうふうに見るかとか、対話にどんな影響があるかとか、そういうことを考えていらっしゃるのではないかと思いましたが、どんな感じのご研究を...

や) はい、私は国語教育が専門なんですけど、国語といえば、今までは文章だけで、教科書だと文章だけでやってきたことなんですけど、まあそれはそれでね、本当にとっても意味があることなんです。現代は文章だけを読むというのは、なかなか日常生活ではないこ

とですし。

あと私が、なんで漫画を国語教育で扱いたかったかっていうと、文章を読むことにやっぱり自信がないというか、そういう人がやっぱりいるのは事実かなと思うんですよ。それで漫画っていうのは、学校教育には全然親和性がないというか、学校に持っていくと没収されてしまったりね。教育にはもう全然馴染まないものではあるんですよ。だけど、その漫画を使って、学習者のみなさんの意識を大きく変えて、自分にも読む力があるということを実感して、それも自分の読む力だけじゃなくて、お互いに、ほかの人の読む力も認め合って、クラス全体で高め合える授業ができるのが漫画じゃないかなというふうに思ったんですよ。

文章、文学的文章に関してですけど、解釈を構築するっていうのはすごく大事なことだと思うんですが、文章だと根拠を探す時にどこに書いてあるのかっていうのがなかなか見つけにくいし、そもそもその文章を読むことに自信がない状態だと、もうわからないという一言で片付けてしまう。そういう状況をなんとかしたいなあという思いもあり、漫画だと学校教育にあんまり親和性がないので、日常的に楽しんで読んでる状態で、誰でも、勉強ができるできない関係なく、楽しんで読んで、根拠っていうのも、画像とかコマの形とか、文章よりも複数あるし、見つけやすいというのが大きいんじゃないかなと思って。

それで漫画を国語の授業で扱おうという、そんな発想になり、斬新な研究ですが、めげずにやっているという、そんな状況です。

も) 本当、思いました。これは芸術だろうと想うような作品に出会ったりとかしますね。漫画を描くかたは、しっかりと準備をして、海外に出たりとか、いろんな取材をしますよね。その取材に基づいて、ストーリーの構築などを考えながら描いているということをい

ろいろ読んで解って、やっぱりこれは芸術の世界だなと思いました。頑張ってください。ありがとうございます。

3. 人間にできること

さ) うん、だから、文章のようなテキスト情報だけだと今のAIは作ることができるだろうけれど、漫画っていうのをAIが作れるかっていうとかなり難しい部類になるんじゃないかとちょっと思い始めてます。絵だけ作るとか文章だけ作るとかならそれぞれ簡単なんだけど、それらを組み合わせで、しかもあのコマ割りを正しく認識するようにできるのでしょかね? 作者と読者とのユーザーインターフェイス、言ってみればある種のインタラクションとしてのやりとりが、必ず作ってる最中には発生してると思うんです。それが文章だけとか絵だけとかなら、わりと一方通行でもいいように思うんだけど、漫画って今思うとちょっとAIには難しい仕事なんじゃないかと思います。

も) そうですよ。確かにね。その人間の感情とか、あとどういうふうにセグメントを繋ぐかというのは、もう本当に作者の個性ですよ。

さ) データが取ればね、例えば、マンガのコマ割りをどういうふうに読んでいくかを視線追跡してデータとして取っておいて大量にビッグデータとして得られるならいいんだけど、多分そんなものは取れないので、そうするとやっぱりちょっとあの同じようなコマ割りでのあの漫画っていうのは多分作れなくて、AI特有のコマ割りの漫画みたいになって、それがさて人間にとって読みやすいのかどうかは試してみてもいいところではあります。そういうところは今の人間っていうところから考えると、漫画は割と特有な感じがします。

も) 個性がないとできませんもんね。はい、

ユニークリー・ヒューマン, 人間にのみに特有な能力, ということで, 漫画はその一つではないかなというご意見が出たと想うのですが, どうでしょうかね。他にこれもユニークリー・ヒューマン, 人間らしいと言えることは何でしょうか。まず, 「人間らしさ」と聞いたときに, どういうことを思い浮かべますかね? 思いやりとか, 競争とか? でも, 多分競争だけだったら, 人類は, 種としてこれぐらい繁栄できなかったと思うんですよね。

さ) 本人たちは気づいてないけれども, 動物たちも実は「競争」はしてます。結果的に人間がそういうふうにはラベリングしてるだけですけどね。客観的に見たときにあれは競争だというふうに認定することはできるし, あれが共感だというふうに認定することができるし, あれが観察だというふうに認定することができると思うんです。だから今ふと翻って, では人間に特有のがあるのかって言われたときに, いや, 言葉だってわりと最近では鳥類とか鯨類とか霊長類とかだって, まあまあ言葉らしいものがあるというふうに研究は進んでいるわけですから, 言葉だけが人間だけかという, 実はそうでもないというふうになります⁽¹²⁾。二足歩行の話も人間らしさのなんかではよく出てきますが, プロセスとしてそういう構造を通ってきたことは分かるし, そして脳が発達したことはもちろん理解できるけれども, でもそれが人間に固有な感じはボくらにとってはし難いと言えます。だから本当に人間に独特のというようなものって何だろうというのは, ちょっとにわかには思いつかない気がします。

も) 本当にね, 私もそう思いました。ユニークリー・ヒューマンって, 考えれば考えるほどわからないっていうのは, 私は莫大なところはやはり科学が未だそれを特定化できるほど発達してないというか, 追いついてないのだと想いました。まだ人間のことすら充分わ

かりませんからね。シジューカラは, 素晴らしい先生が研究を継続してくださったから, 鳥類に文法があるということは解る段階になってきた。ある意味, 結局人間っていうのは自己申告でやってますからね。自分たちの種の中で自分たちの言葉を使ってやっている。それなら, ユニークリー・ヒューマンって何でしょうね。

でも, 例えば, さっき佐々木先生は, 漫画は人間にしか描けないよねって, さらにとおっしゃったと思うんですよね。そういうことを考えると, 私にはよく解りませんが, 何がユニークリー・ヒューマンかは, 人間はこういうことができる, こういうことができないというアプローチをとると, 少しはその概要にたどり着くことができるのかなとも思いますが。

4. 子どもの認知と視点の入れ替え

さ) その点で言うと, 例えば, 心理学では「心の理論」⁽¹³⁾というのがあります。Theory of Mind⁽¹⁴⁾と呼ばれています。サリーとアン課題⁽¹⁵⁾として有名ですが, 少しバージョンを変えてお話しします。例えば, Aという人がいて, Bという人がいて, AがBのことを見てるとします⁽¹⁶⁾。このBが, 箱の中に宝物を入れてから部屋を出て行って, 別の人Cが入ってきて今度はこの箱から宝物を持って行ってしまったとしましょう。そうすると, Aはその2人の様子を両方見てるわけですが, その時にこれらの様子全体を見ていたちっちゃい子に, 再びやってきたBが箱に宝物はあると思うかどうか聞くとします。Bにとって宝物はあると答えるかないと答えるか問うと, ちっちゃい子は宝物はないって答えます。なぜなら, さっきCが宝物を取っていったのをそのちっちゃい子は見てるからです。でも, Bにしてみれば部屋にいなかったときの出来事なので, Cが取っていったか

どうかなんて見てないので、本来Bの立場になった心の理論からすれば、ここには宝物があってしかるべきと思い込んでるはずなわけですが、ちっちゃい子はその認識ができないのです。でも、ちょっと大きくなって五、六歳ぐらいになってくると、認識できるようになってきます。ある種のメタ認知であったり、心を相手に移して（あるいは映して）知ることができるというような能力、つまりそれが人間なのかなと思うわけです。ゾウとかイルカにはちょっとできなさそうな気はするんです。

も) その「相手にうつして」ということ、もちょっと説明していただけますか？

さ) 相手に「うつして」というのは、結局この全体を見てるちっちゃい子がBの立場に立てるか、Cの立場に立てるか、要は視点の入れ替えをちゃんとできるかどうかです。今、Aがその子本人だとして、つまりそのテストを受けている自分だとして、その子がAの立場になったときに、ちゃんとBとCの立場に立てるかということなのです。だからそこで心がちゃんと移動できないとダメですよ、ね、見方がね。

も) 心が移動できるということですよ。教養教育部でぜひ学生さんに学んでほしいと思う、観点を移動させるというか、いろいろな観点からものを見れるようになってほしいというのは、そういう力が関係あるかもしれませんね。

さ) 最近、空気を読むのがみんなうまくなるとかよく言うけれども、空気を読むのもある種の一つのそういう能力かもしれないです。

も) 確かに。どうでしょうか、山田先生。ユニークリー・ヒューマンって、もうこの世界に行くとするでにどっぷり浸かってらっしゃるんじゃないかなと思って... (笑)。

や) いま佐々木先生のお話聞いて、なんか近

いかなと思うことがあったんですけど、私、ドラえもんの授業を作って、いろんな小中高大で研究授業をさせてもらって、自分の研究に生かしてるっていうそういうことをやってるんですけど⁽¹⁷⁾、ドラえもんのストーリー⁽¹⁸⁾の中でなんかちょっと長くなっちゃうんですけど。

犬と飼い主がいるんですね。で、犬は飼い主にいじめられているんです。だけどその飼い主は昔は優しく、犬が子犬の時は仲良く遊んでくれてたんですね。何かがあって、ちょっと今乱暴ものになって暴力をその犬に振るってるんですね。で、ドロン葉っていうドラえもんの秘密道具があって、そのドロン葉を犬の頭に置くと、効力をね、発生して「ドロン」ってなって、犬と飼い主が入れ替わるっていうストーリーなんです。

犬の方は飼い主の姿になるんです。犬をいじめてた飼い主は犬の姿になるんです。で、犬の姿になって、ずっとその犬小屋の付近で繋がれて、足があるのに歩けないとか、ご飯ももらえないっていう、そういう犬の立場を経験するんですね。一方、飼い主の姿になった犬は、野球をしたり、楽しく遊んで。でも最後には飼い主のところに戻ってきて、また入れ替わる、元通りになるってことをやるんですけど、自分の姿をした犬が帰ってきたときに、犬の姿になった飼い主がこうお腹を上にして「なぐるならなぐれ！いつもおれがやってるように⁽¹⁹⁾」って言うんですね。

殴るなら殴れって言ったのに、入れ替わった犬が殴らなかつたんですけど、学習者の方々に「どうして殴らなかつたんだろうね」という問いかけをしてるんですけど、小学校の子に聞いたときに「一日入れ替わって反省したって思ったから、殴らなかつたんだよ」というふうに言うんです。すごくて、いい考えなんですけど、でも「お腹上にして殴るなら殴れなんてちょっと態度が悪くな

い?」って言ったら、「いや、これはこの飼い主なりの謝り方なんです」って言って、「こんなふうにしかな謝れないんです」って、言ったんですよ。で、それをその犬の方もわかってるからちょっと態度が悪いんだけど、これが心からの反省の言葉なんだっていうふうに受け止めたって小学生が言ったんですけど、それってそのストーリーの中の登場人物に思いをいたして、この立場でこんなふうに相手のことを見てるとか、その登場人物の性格とかを加えて判断してるってことなのかなと思って。そういうことも人間特有なのかなって。佐々木先生のお話とちょっと違うかもしれないけど、なんか近いかなと思いました。

も) 確かに確かに。これは、やはり子供で差はあるのでしょうか。それとも年齢によって変わってくるのでしょうか。

や) やってみてとても興味深いなと思って、今後研究したいと思っていることなんですけど、おそらく年齢によって違うんですよね。小学生の子で一番いい考えだなと思ったのは、飼い主が犬になって「ウオオーン、ワオーン」って遠吠えしてるコマがあるんです。ただ「ウオオーオーオー オーン ワオーン⁽²⁰⁾」って書いてあるだけのコマがあるんですけど、そのコマを解釈の根拠にしていって「これは犬語なんだ」って。

読者である私たちは人間なので、遠吠えとしか読めないけど、この中に含まれている意味っていうのは「ごめんね。いじめてごめんね。帰ってきて!」っていうそういう意味が含まれてるっていうふうに、小学生は読んで。犬語がわかる犬が声を聞いてわかるっていうふうに言う。それは小中高大で授業やってきたんですけど、小学生にしか出なかった考えなんです。

も) 面白いですね。発達とか、そういう目で見がちだけれども、やはり小学生のほうがも

しかしたら大きなことを見ていて、それを表せないだけかもしれませんね。

や) そういうなんか、根拠が割と説得力があるというか、それを高校生とかに紹介すると「わあ小学生天才だあ」と。すごく面白かったですね。やっぱり小中高大って、いろんな年齢の方とね、授業して。うん、すごく面白かったです。

も) よく米国で、Kids are people, too. というのですが、これを日本語に訳すと、「子供たちも人間だ」となってしましますが、そういう意味ではなくて、私たちは子供を「小さい人間」として、つまり、何かを基準としてそこにまだいたらない人間、例えば、大人になる過程の人間などとして見がちなのですが、子供は3歳なら3歳、5歳なら5歳の、もうそれだけでコンプリートというか、それぞれに完全さを備え持つ、完全な存在としての人間なのだという意味なのですが、今、少しそれを思い出しましたね。

やはり、このように小さな頃から視点を変えられることができる技を持っており、自分を相手の立場に立たせたりとか、相手の世界を相手の気持ちで解釈したりとか、こういうことがかなり幼い頃からできるということは、これはもうユニークリー・ヒューマンの特質の一つに入るかもしれませんね。

5. 人間になるにつれて刈り込まれる人間らしさ

5.1. カテゴリをつくること

さ) それで言うと、そうであるにもかかわらず、社会的な学習によってそういった多面的な能力がだんだんだんだんと損なわれていってしまうとか、脱落していってしまうとか、刈り込まれていってしまうとか、そういう現象が結局起こってるのが今の大人たちの社会だというふうに言えます。だから、なんだか子供たちのまんまだったら、

いろんなことが結構うまくいくのに、うまくいかない原因はみんなが大人になったからであって、だからボくら大学人としては、やはり大人にならない術をいかに教えるかというお知らせかというの、大学の人間しか多分できないんじゃないかなっていうふうにちょっと思ったりします。なんか今のお話を聞いていて、やっぱりちっちゃい頃から徐々に徐々にそうやって発達していく過程で失われていくものがあるんだということが本当によくわかりました。

も) 確かに確かに。それは何故でしょうね。人間が皆、子供という時期を経て育つと仮定したら、皆やはりそういう美しい世界を知っていると思うし、皆やはりどこかお互いを探している、そういう部分を持っていると思うのですが、そういう人たちが集まって少し歳をとっただけで、何故さまざまな大切な観点を見逃してしまうのでしょうか。

さ) 例えば、心理学なんかでは知覚、つまりボくらがこういう知覚で目で見えるとか耳で聞けるとかっていうのが、今見えているものが、そう今はこういう女の人が2人いるとボクには見えて知覚する⁽²¹⁾けれども、それは、この感じのタイプの人が見えているということに、何度も何度も曝されてきたから、これは女性だっていうふうにだいたい頭の中で知覚するわけです。でもそうではない世界で暮らしてきた人、例えば男たちばかりの世界で暮らしているとか、女たちばかりの世界で暮らしているっていう場合には、もっと何か違うカテゴリーを多分見つけることになります。そういう知覚⁽²²⁾って、多分統計学習の一つなので、統計的に最も多かったものが今のボクらの学習として、今こう見えている、こう聞こえてるっていうふうに知覚できるだけなわけです。だから、子どもたちも最初は独自に、つまり unique にいろんな発想なり多様な表現なり感じたりしてくれるんだ

けども、周りからそれらを認めてもらえないとか刺激されなくなってくると、どんどんどんどん統計的には頻度が少なくなっていく問題だから、結果的に、そんなことやったっけあったっけ(?) みたいなことになるということなのかなと、単純には考えてしまいます。

5.2. 制約をかけないこと

も) 人間らしさというのが、どこかで迷子になってしまうのでしょうか。そうならず、子供のころに当たり前に持っていた、ある意味開かれた感覚を持ち続けるようになるには、どのような要因が関係してくるのでしょうか。家庭での接し方など、さまざまな変数があると思いますが、山田先生、学習者の立場からさまざまに調査されてきて、この子たち変わってほしくないなって想われたこと、きっとあると思うのですけど。

や) そうですね、私、最近短大の卒業生とお話してて、短大では漫画が教科書っていうすごく斬新な授業もある⁽²³⁾んですけど、その授業で「この考え方もいいね。この考え方もいいね。ああ、この考えもいいよね」っていう。まあ、そういう意図的に複数の答えが正解の範囲に入ってくる授業をやってるんですけど、そうなるとその卒業生の方が言ってくれたのは、高校までは結局国語の授業って答えは一つだったっていうか、先生がこう言ってほしいっていうのがあるんだらうなって思ったという。それがちょっと違ったら、「あ、今の答え違ったな」って思ったとか、その生徒なりに思って。先生のね、反応を見て、「あっ」て思っちゃった。だけど短大の授業はそうじゃなかった。何を言ってもっていうか、違う考え方が「それもいい」っていうのになったので、全然高校までの授業と違ったっていうふうに言ってくれた学生さんがいたんですけど。

私もそれはね、自分自身も経験のあること

で、やっぱりその小学生は割と元気いっぱい好きなことを言って、相手の反応とかも気にしないのかもしれないんですけど、やっぱり中学生高校生とかになると、「この答えは正解なのか、不正解なのか」というどちらかというところがあって、短大生でも「どう思いますか？」って聞いて、すごい長い間悩んだ挙げ句に「わかりません」っていう。なんかもうやっぱり考えはあるんだけど、それを発信して、「それは違います」みたいな否定されることがなんか怖いというか。

も) いやですね。

や) やっぱりね。答えが一つであるというような、まあそれももちろん大事なことはあるんですけど、それだけでやっていくと、やっぱりテストで点数取れるか取れないかっていう、なんかそれだけの話になっていって、文学作品を楽しむとか自分の頭を使って読むとか、そういうようなことが、ちょっと希薄な感じになっちゃうので、やっぱりそういうことを少し意識して、避けてみるのもいいんじゃないかなと。あの個人的にはね、思います。

も) 確かにそうですね。漫画を読んでいて、私が一番楽しかったのは、自分に制約をかけることで、ドラえもんもそうだし、こういう世界はとても大事ですね。一つだけ正解を求めてしまうというのは、何でしょうかね？これ、産業革命の名残ですかね？

さ) いや、やっぱり教えやすいからだと思います。国語の教育なんかも、この前も山田先生とは廊下でそういう話⁽²⁴⁾を何度かさせてもらってるけれども(笑)、やっぱり中等教育までの国語の教育が、他の教科と同じように一つの答えの中に解を求めるというね。一方で、もちろん別にそれをやってもらっててもいいんだけど、例えば、こういう答え、そういう答え、ああいう答えがあったとして、ボクが例えば3パターン言ったとし

て、この一つは、なんかこういう文脈ではすごくいいよね、でもこういう文脈だとダメよね、あるいはこの答えはこういうカテゴリーの中では合ってるけれどもこのカテゴリーの中で考えるとちょっと意味が違うよね、というような、そういう物事の教え方をしてくださってるんだったら、ボクは国語教育も有能だと思っただけけれども、そういうことはボクは少なくとも高等教育の中に入るまでは全く経験したことはない。大学に来て初めて自分がこうやって教える立場になって、やっとそういうことを意識しながら、学生たちに自分の担当科目を使って教えることができています。だからゼミなんかでも今まさに山田先生がおっしゃったようなやり方のゼミをボクもやってるわけですけど、AでもいいBでもいいCでもいいんだけど、なぜAがいいBもいいCもいいだけじゃダメで、Aはどういう観点から見るとよくてBはどういう観点から見るとよくてCはどういう観点から見るとよいのかっていうことをちゃんとボクらが伝えてやれるかどうか重要なんですよね。それが高校までの先生たちは多分できてないというかないというかあるいは必要性を感じないのかな…。

も) 何故でしょうね。

さ) 一つには指導要領があるからでしょう。やっぱりその中でこういう範囲でこういう文脈だからこういうふうに教えますっていうことが多分決まってると思うんです。構造的にも決まってると思うんです。それ以外の教え方をする先生もたまにおられると思うけれどもね。ボクなんか高校の時、ある先生がずっと同じ国語の先生だったんだけど、彼がいつも小説とかの説明するときに必ず出てくるのは「命のはかなさ」でした(笑)。それしか出てこない。結局、また命のはかなさかあみたいにとっちは思うことになるんだけど、どうせそこに行き着くんだろう、やっぱり行き

着いたあ、みたいなね。何やってようが、命のはかなさみたいなところで国語はやっていくみたいなことがね、でもそれはとても面白かったです。(笑)

いや、それは確かに一つ真実だと思うからいいんだけど、それはさっきの話で言うと、全部の文脈だけでOKだろうみたいな話だからで、こういうカテゴリーだったらどう考えるんだとか、こっちのカテゴリーだったらどうなんだってことを、もうちょっと説明してくれよとは思ってました。でもまあ、究極的にはね、合ってるわけだから、まあいいかと思って楽しく聞いてましたけどね...

5.3. 観点を変えること

も) それで思い出しました。英語の先生で、全然関係ないかもしれないけれど、教室に入ってくるなり、黒板にカカカッと英文を書くんですよ。それが、「I think that ...」という文でした。そんな文はもう習っている、知っていると、生徒は皆思うのですが。そして、先生は、that 以下は目的語でゆえにこれは名詞なのだと、毎回、毎クラス、あ、また言うた、また言うてると学生は不思議に想っているわけですが。でも、それである日、これは目的語だとハッと気がついて。それが、気づいている自分に気がついたという感覚でした。

さ) その教え方ね、ボクはね、院生の頃に塾の講師をしていたとき、小学生に分数の割り算を教えるのに、どうのこうの言わずにとりあえず分数の割り算がきたら逆数かけろ逆数かけろっていうのばかりずっと言っていたら、そのうち生徒たちはそれがドリル的にできるようになってできるようになると、今度はもう逆数はなぜかけるのかということを自分で考えるようになる。だからボクらがわざわざ教えなくてもドリルをずっとやってくるだけでなんかどこかではたとメタ認知するんですね。

も) 不思議ですね、あれも。やはり自分の世界が突然わかるというのは、クロード世界、閉鎖されている世界の端にたどり着くのですかね。そうすると周りがパッと開けるといふか。

さ) 自分が知ってることややることがトレーニングの範囲だっていうことにどっかで気づくんですね。そのボーダーを見つけた瞬間にその外はなんだっていう風になって、これは目的語だったのか、これは分数の割り算ということだったのか、というふうにわかってくるっていうね。だから、そういう一つのトレーニング方法はあるだなとは思ってたので、ボクの授業で「情報リテラシー」なんかでもそういうやり方を取り入れたりしてます。でも、さっき言ったような、こういうカテゴリーみたいなことをやっぱり、もうちょっと学生たちには知ってほしいなと思うのが最近強いです。

も) 確かにね。一つの世界を教えるために、先生側としては、たくさん時間と労力を使ってきたかもしれないけれど、大学教育としては始めからマルチプル・ワールドというか、マルチプルな観点が必要になりますし、自由自在に心が動けるようにということですね。でも、小学生にとっては、そんなのはもっと子供の頃も知っていたけどみたいな感じかもしれませんね。

さ) そうですね。メタ認知はしてなかったかもしれないけれど、結果としてはあのときやってたことになるっていうのはありえますから、それがなぜこう刈り込まれていくのかっていうことを考えれば、結局、統計学習だっていう気がしないではないです。だからある意味、いろんな面で豊かな人たちに出会えば出会うほど、統計的にも有意にみんな多様になっていくっていう可能性はあると思うんです。だからボクは大学にはたくさんの人に行ってほしいなと思うんです。

も) いろんな人と会ってね, いろんな経験してっていうのがね。

さ) 変な先生たちにいっぱい会うとか, 変な経験をいっぱいするとか, 変な学問に出会うとか, なんかそういうのがやっぱり大学でしかできないですからね。

も) 「正解」が一つではないということは, とても大切ですね。実社会もそうですから。科学的な意味で, 人間の心, 存在そのものは, 多様な見方に対応できるように, もともとから創られているのかもしれませんが。もしかしたら, 人間の「観点を変える」という直覚, メタにメタを重ねて, 想いもよらぬ切り口から世界を革新するという本能が, 言語を操る能力と同じように, ヒトには始めから脳にハード・ワイヤードでセットされていて, だからこの種は, ここまで生き延びられていろいろな工夫を重ねてこれたのかもと考えます。人間には, どんどんパラダイム・シフトする力があるのかもしれない。今日, 皆さんのお話をうかがって, 観点のシフトは, 人間の生物としての一つの特徴かもしれないと思います。

6. おもしろいと人間らしさ—感情とAI—

も) 観点を変えることがユニークリー・ヒューマンなこととして, 「人間らしさ」と聴いて多くの人が想い浮かべるかもしれない「想いやり」についてですが, 科学技術が人間をここまで地球上で支配的な位置に押し上げたのは, 明らかなことだと想いますが, 通常, 「科学技術」は「理性・論理性」と結びつけられるとしたら, それと対立するような概念にも想われる, 人間の情緒面, 非合理的とまでいえるような, そういう人間の感情は, ユニークリー・ヒューマンであるとは言えると思えますか? 感情を共有することにより, 親近感を覚えて, 人間性のある豊かな社会に繋がるとも考えられますが。

さ) 感情は難しいですね。なので, 難しいから, ボクもできるだけ遠ざけてきたっていうところはあるんです(笑)。

も) 人間に関するトークだから, 絶対に触れたかったテーマなのですが。

さ) 感性だと, ボクはあの研究テーマの対象にしてきたけれども, 感情っていうのはあんまりで, せいぜい嫌悪感とかそういう程度のものでしか扱えなくて, それ以外の感情ってなかなか難しいと感じています。心理学なんかでも, 欧米はそうかなあ, psychologyっていうと, だいたいmindの方のサイコロジが基本なんだけど, 日本のサイコロジって, なぜか感情とか情緒とかそういうheartの方のことを思い浮かべる人がすごく多いんです。それをどうやって払拭するかっていうのが, ボくら心理学者のある意味一つのテーマになっています。だから, いかに学術的な心理学がみんなの思ってる心理学と全く違っていたということを知らせることができればオッケーなわけなんです。なので, そのぐらゐに感情の研究ってなかなか進んでないし, もちろん感情心理学っていう分野はあるけれども, ボクはやっぱりちょっと全然手が出せてないところではありますね。

も) ヒトが人のことをおもんばかりとき, 例えば, 山田先生のお話にあったように, 小学校の子供が相手の立場に立ち, 「あの遠吠えは, 飼い主の謝り方なんだよ」と, 自分の心を相手に移行できるときには, やはり人間の「感情」が関わっている気がするのですが, そのような「感情」は感性なんですかね, 感情なんですかね?

さ) 感情でしょうね。感性というともうちょっとテクスチャとか質感とか感じ, みたいなのですからね。例えば感性と言うと, ツヤツヤしてるとかザラザラしてるとかもだし, 透明感とか赤っぽいとか青っぽいとか, どちらかというとか感覚や知覚に関わることに

なりますね。そういうのが感性に近いかなと思うんですけど、感情っていうのもう心の底の方から湧き上がってくるエモーションみたいなのが感情ですね。だから、怒りであるとか、楽しさとか、悲しさとか、よく言われる六感情⁽²⁵⁾っていうのが感情の中に含まれていると言えます。

も) 「人間らしさ」を考えたときに、やはり感情とか思いやりとか、私なんか、思いやりとかがすぐに浮かぶのですが、その類の人間の特質に、もし感情が何らかのかたちで関わっているとすると、ユニークリー・ヒューマンな特質のひとつとしての感情の研究が難しいというのは、人間の「感情」が定義しにくいということですかね？

さ) その定義しにくさは結構大きいかもしれないですね。操作的に定義ができないっていうのはあるかもしれない。

も) 定義ができないと要素が決められない。すると要素を操作もできないから、学問としては成り立ちにくいということでしょうか。どうでしょうか、山田先生。先生が小学生のかたがたとインターアクトされるとき、子供の感情の渦の中にいるのではと思うのですけど...

や) 思いやりが人間特有っていうので、さっき思ったことがあるんですけど、私、向田邦子さんが好きなんですけど、最近、その向田邦子さんのエッセイをちょっと読む機会があって。向田邦子さんのエッセイは中学校二年生の国語の教科書に「字のない葉書⁽²⁶⁾」っていう教材がずっと採録されていて、あと高校の教科書に「ごはん⁽²⁷⁾」っていう東京大空襲の時の経験を綴ったエッセイがあって、これも結構長く掲載されています。どちらもそうなんですけど、邦子さんのお父さんが明治生まれの人で、本当はすごく心優しくて、家族思いでっていうようなところを邦子さんがわかってるというか読み取ってる。それがわ

かるのがこの「字のない葉書」と「ごはん」っていうエッセイかなと思うんですけど。

照れ性で優しい言葉とかかけられないんですよ、お父さんは子供に対して。でも、本当はすごく優しい。自分のことを思ってくれてるっていう。「人間が発する言葉がすべてじゃない」というか、それは表面的にそういうふうになってるんだけど、その裏にある本当の感情みたいなものを読み取る力っていうのは人間特有かなあと思って。さっきの観点の話も、ちょっとそのエッセイを思い出したんですけど、東京大空襲の時、もう本当に命からがらみたいになっている時にお母さんがお父さんのよそ行きの靴を履いて、畳を縦横に走って汚したみたいな、それで「少し面白かった」っていうような感じのことがあったり、邦子さんが小学生の時に、肺病になっちゃったんですけど、肺病になって「少し美人になった気がした」とか、いろんなところから捉えられる。本当に悲しいとか、悲惨とか、そういう時にも全然違ったところから見てる自分っていうか、そういうのがあるのもやっぱり人間なのかなっていう気がして。向田邦子さんのエッセイって長く読み継がれているんですけど、時代が変わってもずっと変わらない人間の本質みたいなものに触れてるので、多くの人が「あぁいいな」って思うのかなって、いま先生方のお話を聞いてて思いました。うん。

も) そうすると佐々木先生、それってAIってできますかね？人間の心の奥のテリトリー。

さ) 難しいと思いますね。やっぱり今のところはそういうテキストベース、言語ベースで作られるもの、つまり、そういうデータがもとになっているのがほとんどなので、さっき言った漫画も難しいねって言ったのは、やっぱりその両方組み合わせる、その二つの漫画や図の世界と言葉やテキストの世界とをちゃんと対応させて流れを作れるかとか構成でき

るかっていうことと、まさに同じことなので、これは感情とテキストとを出されたときに、その裏に潜んでる感情を推測させるっていうのは、人間でさえ難しいとは思いますが。いわんや今の山田先生の話なんかのような、特に向田邦子なんかを理解しようっていうのは人間じゃないと逆にできなくて、さっきのあの漫画の作者が、実際に書いている時には必ず読者と対話しながら、多分こういうふうに置くと上手く読めるっていうふうを考えながらあるいは対話しながらやってるはずなので、それが優れた作家はそういうことをしてると思うんですね。だから例えば、歌手とかでもきっとそうなんじゃないかなと思いますね。優れた歌手なんかは、自分が今この音符と歌詞だけでできたものを歌えばいいということではなくて、その裏側にあるものをどうやって出すかっていうことを表現するのがいわゆるアーティストと呼ばれる人たちだろうから、記号で書かれているものがそのまま理解できたらハイオクっていうのは全く違うっていう意味では、そこが人間らしいと言えるかもしれないですね。

7. 人間の向かう先—人間を取り戻す—

も) 確かに確かに。ところで、一つ皆さんにうかがいたいなと想っていたのですが、人間ってどこに向かってっていると想われますか？これは、「人間って何でしょう」と同じぐらいにビッグ・クエスチョンの聞き方だと思うんですけど。

さ) 個としては、(強調して) 個としては、学生とか卒業生とかよくここ⁽²⁸⁾に喋りに来る時も、言ったことがあるんですが、なんで生きるのかなってね。人間誰しも一回は考えると思うんですけど、どっかのタイミングで、なんで人間って生きるんでしょうかって、何のために生きるんでしょうかってね。いや、ボクとしては、何かのために生きるっ

ていうことをすると、その何かがなくなったときに生きれなくなっちゃうじゃん、みたいなことを普通に言ったことがあって、ああ、なるほどって思ってくれて、じゃあ何のために生きるの(?) って言ってくるから、いや、生きるために生きるんだよ、ってね。ちょっとこういうのは実存主義的⁽²⁹⁾なところもあって、難しい面はあるんだけど、でもそういうふうにおけば、生きるの楽じゃないか、みたいに言ったことあったんです。で、その生きるために生きるというふうにメタ的に見れるかどうかっていうことも一つの能力だし、生きるために生きてれば、まああの言いようだけれど(笑) 死なない限り生きてられるからいいんじゃないの、っていう楽観的なその見方もあるからね。一方で、全体的な見方で見たら、やっぱり人類にしても生物にしても種として一度はどっかで滅びるしかないから、おそらく滅びに向かっていくというふうに究極的には言うしかないなあと思えるところあります。個としては、やっぱり生きるために生きましようよってね。それを楽しむことがやっぱり人間でしょうみたいに個人的には思ってます。

も) 生きるとき、生きるために生きること、そのこと自体が素晴らしいということですよ。山田先生、どうでしょうか。

や) 学長⁽³⁰⁾が卒業式で「人間は幸せになるために生きるのです」って言われてたんで、それは本当にそうだなって思いましたし、やっぱりその、だから逃げてもいいというか。学長は命があることが一番大事だから、何か壁にぶつかったときに、乗り越えるだけが方法じゃなく、それを回避して、どんなに時間がかかったとしても、回り道してもいいんだ、幸せになるために生きるんだから、命があれば何でもできるっていう意味なのかなと思ったんですけど、本当に個人としてはそういうふうに向かっていきたいですね。で、その

さっきの佐々木先生の話で、その人類はいつか滅びるっていうので、結局、文明が栄えすぎると、最後はその文明が滅びてっていうそういう未来図っていうのが結構ある。サブカルチャーの世界でもあるような気がするんですけど、最近読んだ藤子・F・不二雄先生の作品は文明もずっと栄え続けていって、人間だけが切られていくというか、社会に必要とされなくなっていくという、なんかちょっとダークな作品⁽³¹⁾を読んだんですけど、分からないんですけど、F先生のメッセージとしては、そういう世界になる前に人間として取り戻すことがあるんじゃないかみたいな、そういうメッセージがあるのかなと思ったので、一人一人がね、どこに向かっているのかという答えには全然なってないんですけども、やっぱりその、自分を幸せにするための、自分の幸せは社会全体の幸せでもあるからっていうそんな考えを持つっていうのは大事なことなのかなって思いました。

も) 素晴らしいですね。生命があること自体が素晴らしいというのが。やはり、それ自体が重要なのだと想うことが素晴らしいなあと感じます。生きることを、学生さんにも、ぜひ生きること自体を大事にして、生命があること自体が素晴らしいということに気付いていただきたいですね。小さな頃にいろいろ自分が持っていたものを取り戻すというか、そういう観点からも、学生さんには、大学時代、大学生活をあらためて見てもらいたいなと思いますね。

さ) その「取り戻す」っていうのいいですね。さっき最初のほうに山田先生がやっぱり小学校などちっちゃい頃に漫画の読み方だとか見え方がこうだったっていうのをだんだんだんだんと刈り込まれていっている状況があって、それが大学になってもう一度取り戻すっていうリカバーするっていうのかなか復旧しましょうっていうか復興しましょうっていう

かね、なんかその考えがとても大学に合うかもしれないですね。うん、なるほど、なるほど...

も) 先生がた、皆さま、一言学生さんに向けて、想われていることでも何でも良いのでお願いします。じゃあ、佐々木先生から。

さ) はい、この鼎談が人間というテーマでお話をみんなでしてきたんですけど、人間ってね、なんでもかんでも人間に関わってしまいますから、最も大きなテーマだというふうに考えてしまうところがありました。けれど、皆さん自身がっていうか、学生のみんな自身が、自分が人間であるということがどういうことであるかっていうこと、やっぱり大学の間に一回は考えてほしいですね。生きることでもいいし、死ぬことでもいいし、病気のことでいいし、楽しいことでもいいし、苦しいことでもいいし、なんでもいいんですけど、何かしらのテーマを持って人間っていうのを一度ある面で切り込んでみるっていうか、自分が人間であるということをもう一度振り返ってみるっていうか、自分が人間としてどうやって生きていってるんだろうなっていうことをちょっと振り返ってみてほしいなと思います。それをこの大学の、特に教養教育の科目の中では、そういう機会を作ってくださいる先生たちは多いでしょうから、ぜひ人間って何かっていうことをみんななりに振り返ってみましょうっていうことをやってもらって、そしてそれをもとに未来を少し見てもみましょうかっていうふうにするといいんじゃないかなと思いますね。

も) ありがとうございます。では、山田先生、一言お願いします。

や) そうですね。私も自分の授業では人間にしかできないことをしたいと思っていますので、特に漫画を使った授業だと、いろんな答え、多様な答えが妥当性を持った答えの範囲に入ってくる。そういったような議論をし

て、自分の考えを構築することも大事だし、でもそれよりもっと大事なのは、他の人の考えを聞いて、自分の考えとちょっと違うなあと思っても、いったん受け入れて、その中で最終的に自分の考えをもう一回再構築するっていう、そういうような学びっていうのは、大学でしやすいことかなあと。私は自分の経験上思うので。そして私もそういうことを大学時代にやってきたことが、今につながっていると思います。

もしかしたら高校生までのその学びに自信がないという人もいるかもしれないけど、でも知識を持ってることはそんなに重要じゃないって言ったら、まあ、ちょっとまたね、誤解があるかもしれませんが、それこそそっちは、AIが何とでもやってくれるので、その知識をどう活用するかっていうこと、自分の中でどう活用するか、それもあの他の人の考えを巻き込んで、どんなふうに最終的な判断をするのかっていうことはとても大事なことだと思うので、学生の時期は人間力を高めるすごくいい機会だと思いますので、そういったところを意識して学んでほしいなと思います。

8. おわりに

も) ありがとうございます。学生さんに課題を出したいと思うのですが。

さ) ボクね、一つ、自分が人間的だと思う、自分自身の人間的だと思うところをあげてください。また、その理由を述べてください、っていうのを挙げときます。

や) 「自分の経験を交えてなるほどと思ったことに対して、自分の経験を交えて言い換えてみてください」みたいなのは、面白そうだなとは思ったんです。

も) 私からは、自分がユニークリー・ヒューマンだと感じた時はどんなときだったか、何故それが「人間的」だと思ったのか、それを

具体的な事例を挙げて説明してくださいとします。

本稿では、教養教育科目「教養の門」において受講生に視聴を必須とする「対話」動画6編のうちの一つ、「人間」をテーマとする動画の模様を整理して、「ユニークリー・ヒューマン」、つまり人間にのみに特有な能力とは何かについてさらなる理解を試み、人間とはどのような存在なのかを議論した。

ユニークリー・ヒューマンな能力として、漫画家が架空の読者と対話しながらコマ割りを創ること、音楽家が音符や記号に還元できないメッセージを奏でること、読者が文学作品の行間を読むことなどが挙げられる。また、人間には多様な観点から考察して、自分の心を相手に映す(移す、写す)という視点の移動ができる。例えば、目の前の状況を一般的な解釈とは全く異なるところから見ている自分に気づくとき、そのメタ認知は人間という種に特有かもしれない。私たちが当たり前と思っている日常のささやかな活動には、実は高度に発達したAIにも真似ができない豊かな思考や心身活動が秘められている。

一つだけの正解や不正解にこだわらずに、大人にならない術を覚え、小さなころに人間として持っていた視点を取り戻すことや、ただ生きることを楽しみ、自分の幸せが社会全体の幸せであることを願い生きるために生きることは、人間がこれからどこへ向かおうとしていても、人間らしい未来を創る道標になるだろう。そして将来AIが何でもやる時代において、人間はさらに人間らしくなり、人類の知識や知恵をどのように活用するかを選ぶことができる。

ユニークリー・ヒューマンな能力とは何か。これからも再発見、再定義されるのであろうが、例えば、自分が今生きていて、見ているもの、感じている感情、聞こえている音、嗅いでいる香り、考えている思考、触れているテクス

チャ、これら全てがユニークであり、一つひとつが自分という存在の素晴らしいさであると、皆がそう理解して、そして今自分の目の前にいる人もそうなのだと認識して、その集団が社会になれば、子供のころに見ていた風景も、社会としても見られるのではないだろうか。それは、誰からも「こう考えろ、こう感じろ」と言われることが不可能な、人間の尊厳、その人がここに生きているという尊厳である。

実は今、どの人も、個々人にユニークな、素晴らしいインターフェイスを生きているのかもしれない。だから、人は生きているだけで素晴らしい。そう感じられる、そして科学技術を駆使してそのような共生の社会を創れるというのは、人間にユニークなことかもしれない。

大学教育、特に教養教育では、大学生らしい学び、つまり多様な答えを自分で発見して隣人と共有し、その中で自らの考えを再度鑄直して世界への新しい切り口を創る、そしてその繰り返しにより人間力を高めるといふ、豊かな学生時代を築くたくさんの機会がある。学生には、ちょっとというかすごく変わった先生たちや仲間たちを巻き込みながら、大学での学びを自分で選択して、自らプロデュース、企画・演出してほしい。

人類の遠い祖先はアフリカで生まれ、その一部は住み慣れた土地を離れて大海に乗り出し、大海原で星の輝きをたよりに新たな道を探し

た。その後に、各大陸に居住地域を拓いたことが、現在の人類の存続の継続を可能にした大きな要因だと言われている⁽³²⁾。当時まだ繋がっていた島々の岸づたいに移動できても、ウォーラシア海域を経て、少なくともニア・オセアニアやリモート・オセアニア西部の諸島まで到達するには、ある時点で岸を背にして、先が全く見えない、ただ目の前に広がる水平線へと漕ぎ出す必要があっただろう⁽³³⁾。

学生たちには、人類の祖先がその手にギュッと勇気を握りしめて、小さな舟で大海原に漕ぎ出したとき、果てしない水平線を見ながら何を考え、どのように日々を私たちに繋いだのか、まずこのことに想いを馳せてほしい。皆さんは、もう新しい世界を探して大洋で木の葉のような舟を漕ぐ必要はない。もし自分が望みさえすれば、皆のほんの指先には「世界」があり、もし自分が選択しさえすれば、興味のおもむくところ、正解のない問いという大海原を探索することができる。Just enjoy.

私たち教員が考え今行動する必要があることは、人間が進化を続けるためには大学は変わる必要があるということである。人類の英知の極限をプッシュする研究という生業においても、地球の未来を担う目の前の一人の学生がもっとその人らしく大学教育を生きる手助けをするという生業においてもである。

注

- (1) 佐々木康成・小西賢吾(2022).《シリーズ対談：教養教育とその周辺》大学という場で学「術」を使う人たち—大学教員どうしの共創的自己分析— 金沢星稜大学人文学研究, 6(1), 41-73.
- (2) 2024年度の「教養の門」のシラバスは次のリンクで公開されている。
https://cpweb.seiryo-u.ac.jp/public/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=CA067Q01&P2=2024&P3=20240401
- (3) 本学の教養教育科目は、2024年度から新たなカリキュラムとして、教養教育科目の現代化、多様化、協同化を目指して、語学系の科目を除く一般科目がすべて1単位化された。
- (4) 受講生用動画教材リンクは以下のリンクで学内に限定公開されている。
https://seiryouacjp-my.sharepoint.com/:v:/g/personal/5000011954_app_seiryo-u_ac_jp/EcrmJp2NTdxLmUfpTFSx2mUBLPr8tVqnVHJj43AD9UaUtA?nav=eyJyZWZlcnJhbEluZm8iOnsicmVmZXJyYWxBcHBAiOiJPbmVEcm12ZUZvcjJlcnJyZWZlcnJyYWxBcHBQbGF0

Zm 9 ybSI 6 lldlYiIsInJlZmVycmFsT

- (5) 地球カレンダーと呼ばれている。以下の文献を参考にされたい。
Wikipedia「地球カレンダー」。Retrieved October 20, 2024 from <https://ja.wikipedia.org/wiki/地球カレンダー>
森川和子(2016). 生物進化の歴史における共生と地球史カレンダー 共生科学, 7, 96-107. https://doi.org/10.32137/kyosei.7.7_96
- (6) 正確には、光合成のできるシアノバクテリアの最初の発生は3月末ごろで、その大繁殖による酸素の大量放出が5月末か6月となる。(注5参照)
- (7) オゾン層が形成されたのは約5億年前だと仮定する。
- (8) 地球カレンダーの作成の方法などにより、期日には多少の違いはある。注5 森川(2016)参照。
- (9) 産業革命が起きたのは約200-250年前だと仮定する。
- (10) 高志の国文学館が「高志プロジェクト」として、富山県の文学、民俗、歴史などの研究を支援するため奨励金を交付している。当該研究は、令和5年度高志プロジェクトに採択された。
- (11) 日本国有鉄道の略。現在のJRグループ各社の前身である。
- (12) 例えば、山極寿一・鈴木俊貴(2023)『動物たちは何をしゃべっているのか? (Kindle版)』(集英社)、岡ノ谷一夫(2010). 言語起限の生物学的シナリオ 認知神経科学, 12, 1-8. など。
- (13) 他者の心を類推して理解できる能力のことを指し、Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences*, 1, 512-526. が初出とされる。誤信念課題と呼ばれる心理検査で調べられることが多く、4歳半から5歳程度で通過できる課題である。
- (14) 当該授業での対談動画では、間違えて、マインドオブセオリー、と言っている。正しくは、セオリーオブマインド、である。
- (15) 課題の中では、その話の中に登場するアイテム(今回の対談で話されているのは「宝物」)に関して、「どこにあるか?」(現実)、「最初どこにあったか?」(記憶)、「〇〇はどこを探るか?」(信念)を聞くことで計られるのが一般的である。
- (16) このときの話者である佐々木は、本来被験者であるAに与えられるはずの課題について、Aも含めた形で課題の手続きを説明し始めているところから察するに、よりメタ的な説明の仕方を試みようとして、結果的に後段の「ちっちゃい子」をAと見なしてしまっている。
- (17) 高志プロジェクト (<https://www.seiryu-u.ac.jp/c/campuslife/news/2023/0609.html>) で開発した漫画の授業を全国各地の小・中・高・大学において2023年度に実践させていただいた。
- (18) 藤子・F・不二雄(2004)『ドラえもん16』(小学館, 初版1979年), に収録されている「ドロン葉」という作品である。
- (19) 注18p.104
- (20) 注18p.103
- (21) Zoomによる対談であったので、話者から見ると、画面のウィンドウには二人の女性の姿が映っているのを知覚していることになる。
- (22) 既知のデータに基づいて未知のデータを統計的に学習して知覚する。カテゴリ知覚という連続的なデータを離散的なカテゴリに分類して学習する知覚の仕方もある。
- (23) 短大部で開講している選択教養科目「現代教養a(メディア表象)」では、田島列島(2014)『子供はわかってあげない 上・下』(講談社)を教科書として扱っている。
- (24) 筆者の山田と佐々木は同じ階に研究室があるため、廊下での立ち話の頻度がわりと高い。国語教育についての話題も、佐々木のその批判的な姿勢と山田のマンガを用いた教育方法との間に親和性のあることが多い。
- (25) 基本6感情(怒り・嫌悪・恐怖・喜び・悲しみ・驚き)と呼ばれるものであるが、日本人においては、やや異なることも報告されている(例えば、Sato, W., Hyniewska, S., Minemoto, K., & Yoshikawa, S. (2019). Facial Expressions of Basic Emotions in Japanese Laypeople. *Frontiers in Psychology*, 10, 1-11.)。
- (26) 『眠る盃』収録。初出は『家庭画報』(世界文化社, 1976)である。
- (27) 『父の詫び状』収録。初出は『銀座百点』(銀座百点会, 1977)である。
- (28) 今回のZoomで話をしている場所は研究室である。すでに卒業した学生たちはよく研究室にやってくることもある。
- (29) 筆者の一人である佐々木の薦める学生への図書の一つとしてフランクル, V. E. 霜山徳爾(訳)(1985)『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録』(みすず書房)がある。人間の意味や意思に対して人間がどのように指向するか、ひいては人生をどう捉えるかについて、実存主義に基づいて著している。
- (30) 2023年度までの4年間の金沢星稜大学女子短期大学部の学長は大久保英哲である。
- (31) 藤子・F・不二雄(2021)『SF・異色短編1』(小学館), に収録されている「定年退食」(初出1973年)のことを指す。

- (32) 門脇誠二(2023). 【vol.16】考古学が探る「なぜ、ホモ・サピエンスだけ生き残ったのか」～発掘された貝殻ビーズが私たちに語りかけてくること～ 三菱金曜会事務局, 未来を拓く一步を支援 助成プロジェクト成果リポート。Retrieved October 21, 2024 from <https://www.mitsubishi.com/ja/interview/interview16/>
また、人類の地球上における拡散の歴史に関しては、以下の文献を参考にされたい。
後藤明(2003)『海を渡ったモンゴロイド』（講談社）
印東道子(2000). 先史時代のオセアニア 山本真鳥（編）オセアニア史—世界各国史27—（pp.17-45）山川出版社
海部陽介(2005)『人類がたどってきた道—“文化の多様性”の起源を探る—』（NHKブックス）
篠田謙一（監修）(2024)『ビジネス教養・超速アップデート 図解版 人類の起源 古代DNAが語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』（中央公論新社）
大牟田透(2021). アフリカを出た人類、どう全世界に広がったのか ホモ・サピエンスの旅路が見えてきた 特集 移動をめぐる「旅」 朝日新聞GLOBE+ Retrieved October 22, 2024 from <https://globe.asahi.com/article/14501100>
小野林太郎・川端裕人(2014). 第2回 人は約3万5000年前から100キロの海を渡っていた めくるめく知のフロンティア「『研究室』に行ってみた」シリーズ, ナショナルジオグラフィック日本版。Retrieved October 21, 2024 from <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/20141127/426037/>
- (33) 注32篠田(2024)参照。